The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	強迫神経症の家族力動に関する研究
Author(s)	小林, 良成
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32001
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【42】

氏名・(本籍)	小林良成（こばやしよしのり）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 4184 号
学位授与の日付	昭和53年3月18日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**強迫神経症の家族力動に関する研究**
論文審査委員	(主査) 教授 金子 仁郎 (副査) 教授 西川 光夫　教授 垣内 史朗

論文内容の要旨

〔目　的〕

強迫神経症の病因に関しては種々の学説がある。強迫神経症がある特定の人格構造を基盤として発症することは，多数の研究者により指摘されている。そしてこのような特有な人格構造の成因に関して素質性，環境性の議論が分かれるところである。著者は環境要因の解明のため，以前に同一環境下ではあるが，養育者と病者の力動関係の相違により一方が発症し，他方が発症しなかった強迫神経症の一卵性双生児の不一致例を報告した。これは強迫神経症の成立に，病者の幼少期における養育者の養育姿勢が，強迫神経症の成因に大きい影響を与えることを示唆している。この研究は不一致例で認められた親子の力動関係が，他の強迫神経症においても見出され，一般化されうるかという検討と，もしそうであれば，その場合の養育者関係力動を一層詳細化し，病者の精神医学的病態構造との関連性に対して検討を加えることを目的とした。

〔方法ならびに成績〕

強迫神経者の人格形成における精神的環境としての家族状況を，養育者の性格，養育者の人間関係の構造，および養育者と病者との関係の面から検討を加えた。対象は27例の強迫神経者ならびにその家族で，資料は病者の精神療法過程を過じて，また両親その他近親者との面接を通じて，得られた知見である。

1．母親27例中16例，父親27例中12例に強迫性格傾向の者が見られ，両親に強迫性格傾向者が多いというばかりでなく，両親以外にも病者の養育に直接かかわっている者に強迫性格傾向の者が多く見られた。（祖母伯母16例中14例が強迫性格者）

2．養育者の他の家族に対するかかわりかたの特徴は，母優位型（7例），父優位型（4例），祖母優位型（9例），伯母代行型（2例），その他（5例）の5つに分けられた。

3．養育者の病者にたいするかかわり方で，重要な位置をしめたものは，ⅰ）支配型とⅱ）心配性型（不安を子供の体験野にまで投げかけ，不安を感じさせることの行動の芽をつんでしまう養育者）で，いずれも養育者が不測の事態の中へ自分をなげかけることができない点で共通している。

4．養育者間に家庭ならびに養育状況における一側性支配が強く（28例中20例），養育者のかかわり方が相対化されにくく，子供に自由の巾が生じにくい。かつ家庭，養育状況の一側性支配者が女性となっている例が多く（母親7例，祖母9例，伯母2例　計18例），そのため養育状況は一層閉塞的なものとなる。

5．父権の強い父親は僅か4例で，権威に乏しく，家庭内では影の薄い存在で，病者へのかかわり合いも希薄で影響性が少い症例が多かった。

6．同胞順位は長子，末子，1人子等，親の影響性を受け易い立場の者（20例）多く，他の同胞の場合は病者の場合ほど，養育者との間に強い結びつきや，一方的な関係は見られなかった。

7．養育状況と病者の姿勢との関係では，ⅰ）強制（支配型）一服従，ⅱ）過干渉過疵護（心配性型）一萎縮，ⅲ）混合型，がみられた。混合型では，祖母が家庭，養育状況を支配している例が多く見られた。この3者の違いと病者の強迫病像の違いに対応が見られた。

〔総　　括〕

強迫神経症の家族力動を検討したところ，一卵性双生児の不一致例で認められた親子の力動関係が，他の強迫神経症においても見出され，一般化されうることを示唆している。ゆえに強迫神経症の病因に，特殊な養育者—病者関係の環境的因子が重要な役割を演じていることを意味している。

そしてこのような養育者一病者関係は，病者を養育者の枠組みの中に閉じこめ，不測の事態に自己決断出来るような場を，養育状況の中に展開させない。

強迫神経症者の存在様式は事態の不測性に対して自己決断でもって対応する不安と苦痛を回避し，相対的な有効性しかもたない形式的確認に絶対的保証を求めて，際限のない繰り返しの中に陥ちこむものとしてとらえることができる。したがって養育者一病者関係に共通して見られる構造的特徴は，強迫神経症の存在構造に原因論的に対応していることを結論づけることができる。

論文の審査結果の要旨

強迫神経症の病因に関しては今日充分には明らかにされていない。本研究は強迫神経症にかかりやすい人格構造成因に環境要因が如何に関与しているかを明らかにするため，強迫神経病者の家族力動，親子関係を詳細に追求したものであるその結果，強迫神経症者の親子関係には，主たる養育者に一側性に支配束縛され，その枠の中に閉じこめられ，不測の事態に自己決定出来るような場を養育状況の中に展開させないものとして，養育者一病者関係の構造的特徴は強迫神経症者の存在構造に原因論的

に対応していることを明らかにした。

本研究は強迫神経症成立に環境因子が重要な役割を演じていることを明らかにしたものとして高く評価される。